

## セラ寺巡礼

六月五日（土） 昼過ぎ。龍王潭公園にいる。昨日とは一変して、曇り空のラサ。少し肌寒い感じだ。

朝起きたとき、頭痛は少し治まっていた。昨晚はこのまま高山病がもっと悪化したらどうしようかと不安だったけれども、ひとまずは安心。もっとも体調は万全というわけではなく、頭もはつきりとはしない感じだ。

しばらく身体を洗っていないので、十一時頃にホテルの共同シャワーを浴びただけけれども、途中からお湯が出なくなつて、ずいぶんと寒い思いをした。

今日はラサ北方の郊外にあるセラ寺（色拉寺）へ行つてみようという計画。バスで行けば簡単なだけでも、バス停にはチベット文字の表示がなくて、どうも利用しづらい。高山病を克服するためには、横になっているよりも軽く身体を動かした方がいいということだったので、散歩がてら歩いていくことにしたのだった。

途中、朝食に屋台のナン（五角）を食べながら歩いた。ホテルからポタラ宮まで西に北京東を行き、ポタラ宮を左手に見ながら、あとは突き当たりまで北へ北へと歩いていけば、セラ寺に着けるはず。

しかし激しい頭痛は治まったものの、まだ頭はぼんやりとして、まるで病み上がりのようなところもない身体の状態なのだ。ポタラ宮の裏（北側）に広がる龍王潭公園で休憩することにした。

広々とした公園では、チベット人たちのグループが三々五々横になったり、チャイのボトルをかたわらにしてくつろいでいる。公園のおだやかな時の流れの中を、老婆が小さなマニ車を回し真言を眩きながら歩いて行く。野良犬は寝そべり、ときおり驚いたように頭を上げる。

しばらく休憩したあと、再びセラ寺の方に歩き始めた。公園の出口の方へ歩いていると、たまたま通りかかった若いチベット人たちのグループとすれ違うときチュバ姿の若い女性がふざけるようにして僕にケリを入れるしぐさをした。え？と思うと振り返ると、何事もなかったかのように、彼女たちは歩いていく。

たぶん彼女は僕を中国人だと思ったのだろうと思う。昨夜、同室の日本人と少し話をしたのだけれども、彼によると少し前にこのラサでチベット人たちのデモがあったということだ。かなり激しいデモで負傷者や逮捕者も多数でたということだった。そのおかげでホテルの料金も上がったのだと言う。チベット人のデモと外国人用のホテルの料金とどういう関係があるのか、ふに落ちなかったけれども、チベットと中国という二つ

の文化の確執を僕は急に身近なものとして知らされたのだった。

そう言えば、チベットの様子は僕がこれまで通ってきた少数民族の自治区、居住区とはまったく違う。なんと言ったらいだらうか、ひどく文化の異なる者どうしが少しも混じりあわないままに居合わせているという感じだ。チベット人たちは貧しいけれどもチベット仏教を核とした自らの文化に誇りをもっている。居住区も大昭寺を中心とした旧市街はチベット人、ラサ西方の比較的新しい地区は中国人というように住み分けられていて、建築の外観もまた水と油のように違う。

おどけるようにして僕にケリを入れようとしたチベット女性の中にどれだけの濃度の中国に対する反感が詰まっているのか、僕には分からない。分からないままに、たった一日の滞在だけでも感じたラサという街に漂う空気の漠然とした感触で納得していたのだった。

#### 解放北路をひたすら北上。

街を出てしばらく行くと、工事のために道路はいたるところ掘りかえされ、山積みになった土や岩のためにひどく歩きにくく、車も通れそうにはないありさまだった。解放北路はバス通りのはずなので、ふと本当にこの道でいいのだろうかと不安になる。しかししばらく土や岩の山、掘りかえされた窪みを避けながら歩いていくと、やがて広い並木道になった。まばらな並木にはさまれた車道部分だけが舗装され、その両脇は車道と同じくらい広い地道。道の両側には何かの敷地らしい長い塀や、ほとんどが平屋の背の低い商店や食堂。視線を少し上に上げると、間近に灰色がかった岩山が迫っている。はるか前方にも岩山。空にはどんよりと雨雲が立ちこめて、行き交う人影はまばら。たまに自転車に乗った人が通りかかるぐらいだ。

歩いていると、誰がどのような目的で暮らしているのか、いくつものテント小屋が立てられていた。ときおり砂煙を上げながらトラックが通り過ぎた。まるで西部劇にでも出てきそうな荒野のただ中の開拓地という印象。

雨がポツリポツリと降り始めたので、休憩がてら閉ざされた倉庫のような建物の軒端で雨宿り。途中に買った紅梅（煙草）を一服した。体調は悪くはなく、また頭痛もなかった。気分も悪くはなかった。

道路の向う側にポツンと一軒のチベット民家が見えた。白い漆喰の外壁に囲われた平家の家屋も白い漆喰の壁。平たく広い民家の屋上の一角にはタルチョと呼ばれる色とりどりの祈りの旗が風になびいている。

雨は降ったり止んだりを繰り返したけれども、強く降ることはなかった。濡れながら歩いていった。（あいにく傘をホテルに忘れてきたの

だ。)やがて前方にそびえる岩山の中腹あたりにチベット風の建物が見え、もしかしたらあれがセラ寺なのかな、と思いつながらさらに歩いていくと、突然右手の岩山の麓に寺院らしい建物が出現した。岩山の麓にはそこだけ緑の木立が密生し、大昭寺の建築に通じるところのあるチベット寺院の姿が見え隠れしていた。

大通りを離れ、セラ寺に向かう道を歩いていくと、数百メートルでセラ寺の参道に至る。数組のチベット人の巡礼者たちがいたけれども、昨日の大昭寺に比べると格段に静かで、ひっそりとした印象だ。寺内部の構成も分からないし、勝手に歩きまわってもいいものかどうか分からなかった。夫婦の巡礼者のあとをついていった。言葉は通じないのだけれども、彼らはときおり振り返り、ついてくるようにと無言の案内をしてくれたのだ。

セラ寺はラサ市街の大昭寺の大衆的なスター寺院という印象とはずいぶん違う。それもそのはずこの寺はラサ北西にあるデブン寺とともに、かつては仏教大学の役割を果たしていたのだ。セラ寺はいくつかの大きな学堂から成り、最盛期には数千人の学僧が修行にはげんでいたといわれる。

石階段を上って学堂に入っていくと、学堂奥のおそらくは本尊だろう仏像を中心にした祭壇に向かうようにして法要を営む集会所がある。そこには今、僧たちの姿はなく、わずかに学僧らしいひとりの僧が掃除をしているだけだ。

集会所の脇を通り、デヨカンの小堂のような堂をまわっていく。小堂には堂守りのような僧がいて、堂に入っていくとぎょろりとしたいちべつを投げかける。

学堂の仏像や仏画のひとつひとつを見ると日本の仏教よりもむしろヒンズー教の神々に近いようなりアリティーとエネルギーとなまめかしさを感じさせるのだけれども、チベット人の巡礼者たちとまわっているとすぐにそのような鑑賞眼はなくなり、まるでひとりの巡礼になったように、個々の仏像のありようはチベット仏教という大きな聖に溶け込んでしまうかのような感覚だ。学堂にヤクバターの匂いは立ちこめ、バターの灯明の明かりだけが薄暗い堂の内部にはゆらめいていた。僕は僕でありながら、いつしかひとりの巡礼になっていた。

ふと気づくと、チベット夫婦の巡礼はいなかった。たぶん先の方へ進んでいったのだろう。彼らのじゃまになっているのではないかと気がつかっていたこともあり、そのままひとりになって堂まわりを続けた。

学堂内部の薄暗い壁面に、漢字のスローガンのようなものが消え残っているのが見えた。荒野の果てのようにも思われるこのチベット、ラサに

まで及んだ文化大革命のなごりだろうか。文化大革命がチベットやチベット仏教に与えた影響、その実態について僕は知識を持たないけれども、少し複雑な気分になって学堂を出たのだった。

午後三時頃だろうか。

雨は止んでいる。しかし今にもまた降り始めそうな曇天。セラ寺の参道脇に腰を下ろして休憩した。

突然、ドラの音が何度か鳴り、それを合図にしたように、ゆったりとした足取りで黄褐色の僧衣に身を包んだ僧たちが、参道を三々五々歩いていく。

木陰に座り込んで休憩している僕に、二人の若い僧が近づいてくる。

「どこから来たのか」

と英語で尋ねる。

「日本」

「日本はいいところだ」

「日本語を私も習いたい」

僕が手にしていたノートを覗き込んで、

「中国語と似ている」

と言う。

「グッバイ」

「グッバイ！」

おそらくさっきのドラは何かの修業が始まる合図だったのだろう。二人の若い僧は少しの会話を交わしたあと、参道を登っていった。

セラ寺から出て大通りに向かう途中、改築中の民家があり、家族の者たちだろうか、チベット人男女が働いているのが目についた。

割石を積み重ねた土台に日干し煉瓦のようなものを積み上げていく。女たちは黒っぽいチュバにエプロンのようなものをつけている。男も女も混じって、数人で煉瓦を屋上のあたりまで手渡していく。その光景に興味を引かれたので、しばらく見ていた。

カメラを取り出し、それでもむやみにカメラを向けるのは失礼にならないだろうか、しばらく躊躇していたのだけれども、それに気付いたチベット人たちは笑いながら、

「撮れ、撮れ」というしぐさ。作業の手を止めたみんなの笑顔がこちらに向いたところで、パチリ。

「ありがとう、じゃあ」と手を振りながら大通りに向かった。

しばらく解放路を市街の方に歩き、たまたま目についた食堂へ。

小さな食堂には客の姿はなく、本当に食事をできるのかどうか不安な

感じなのだけれども、もちろん問題はない。青椒肉絲、米飯と鶏蛋湯で一元。

食堂の前には珍しいソーラー湯沸かしが羽を広げていた。大きな金属性の蝶の羽のような反射板（全長二メートルほど）と、その焦点のあたりには金属性のポット。燃料が乏しいチベットでは重宝するのかもしれないが、それを見かけたのはこの一機だけだ。

食堂を出てからまた三〇分ほど歩き、行きがけに通った道路工事の現場に着いた。道路工事では作業員たちはほとんど身体だけで作業をしている。道路の基礎にするのだろうか、男も女も混じって重そうな石を抱えて運んでいく。

工事現場の外れに山積みされた資材に腰を下ろして休憩。雲間からとさおり暖かい日が差していた。目前に広がる沼地には牛が遊んでいる。沼地の両側は数棟の真新しい団地。それは日本の団地とも変わらない三階建ての団地なのだけれども、各戸の窓の上にはタルチョ風の飾りつけがしてあって、やはりチベットだと僕は思う。

工事現場を過ぎて、人気の少ない大きな交差点を通るとき、『感謝党中央、感謝全国人民』というスローガンを掲げたカンバンが目についた。このようにイデオロギー色の強いスローガンは中国の街でも見かけないので、僕はふと足を止めた。そしてそこにある種の白々しいものを感じていた。

市街に入ってからのは行きとすこし違う道をとり、小昭寺に立ち寄った。そこは唐から文成公主が初めに嫁いだといわれるソルツェンガンポの息子、グンソン・クンツェンの菩提を弔うために建てられたといわれている。セラ寺でたつぷりとお参りをすませたあとだったし、巡礼者の姿も見えなかったので寺には入りづらく、建物の両側に据えられたマニ車をごろごろと回しただけで、寺をあとにした。

街中では時々、チャイと電影の店を見かける。チベット風喫茶店なのだけれども、もちろん映画を上映しているわけではなくて、ビデオなのだ。ラサではテレビはまだ一般に普及しているというわけではなくて、そういう喫茶店に集まって楽しむのだろう。

ヤクホテルにたどり着いたのは、午後七時頃。ホテルの門を通り抜けて中庭に出ると、従業員の女性たちが休憩していた。雲間からもれる日だまりに腰を下ろして、チャイを飲みながらおしゃべりをしている。それがとても気持ち良さそうだったのでコップ（といっても、果物のびん詰の空びん）を差し出して、

「僕にも一杯ちょうだい」

と言うと、ポットから注いでくれた。段ボールの座敷を空けて、座るよ

うにと勧めてくれる。チャイは甘くて、とてもおいしい。日が陰ると肌寒い感じなのだけれども、日当たりでは日差しはとても強くて、暑い。一日の内に四季があるというチベットの気候を僕は納得する。そして昨日、大昭寺前の広場を見たチベット女性たちのチュバがあまりに厚ぼったい布でできているのを不思議に感じていたのだけれども、夏でもこんなに寒く感じる日があるのだからそれも当たり前なのかもしれないと納得していた。

日が暮れて、ようやく夜らしくなってきたのは午後九時半頃。北京時間で統一されているこの国の時間の制度のおかげだ。ベッドに横になって、ガイドブックの情報を仕入れる。バスはゴルムド行きものがあり、およそ一日半の行程。ゴルムドから敦煌までは約半日。明日はキチュ河沿いにラサの西はずれにある西藏長距離バスターミナルまで行ってみよう。そしてできたらゴルムド行きのチケットを購入すること。昨日買って高山病のために飲む気になれなかった五泉啤酒を飲みながら、僕はきつとなにもかもがうまくいくという幸福な予感に包まれながら、眠りの門を入った。